

島間港は南種子町の海の玄関口として、またロケットの荷揚げ港として重要な役割を果たしています。港の歴史は古く、奈良時代から利用されていたと考えられています。江戸時代には、種子島氏に納める年貢米の倉庫が4棟ほど建っていたとされ、その米倉跡は倉跡とよばれています。年貢米は平山村・荃永村・上里村・中之村・西之村・島間村・油久村・坂井村から馬で運ばれ米倉に納められました。その後、風を見計らって西之表の赤尾木城や鹿児島島の種子島家の屋敷に船で運ばれていたようです。港の東側にあるクモリ山には赤尾木城から派遣されてきた武士たちが泊まる仮屋や弓の練習をする的射場もあったといえます。

また、島間港は伊能忠敬の種子島測量開始の地でもあります。文化9年（1812）4月28日、屋久島を経て島間に上陸、5月1日から南北二手に分かれ測量を開始しました。南隊は坂部定兵衛以下8名、島津家役人36名、種子島家役人27名、北隊は伊能忠敬以下8名、島津家役人59名、種子島家役人71名、総勢209名でした。測量には16日間を要したそうです。



伊能忠敬種子島測量上陸の地の碑